

千葉県におけるミナミアオカメムシの
分布と越冬

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 生産環境研究室 清 水 けん健*

はじめに

昨今の地球温暖化により、全国各地で南方性の農業害虫の発生域が北上し、農産物の生産に大きく影響を及ぼしている。ミナミアオカメムシ *Nezara viridula* (Linnaeus) はその典型的な例といえ、1950年代までは九州地方を中心に発生していたが、その後、本州、四国へ分布を拡大させ、近年は関東地方各地においても発生が確認されている(桐谷・湯川, 2010)。本種は極めて食性が広く、イネの斑点米の原因となるほか、豆類や多くの野菜類を加害する。また、温帯性の近縁種で以前から本州に広く分布していたアオクサカメムシ *Nezara antennata* Scott よりも増殖能力が高く(湯川・桐谷, 2008)、多くの都府県で問題害虫となっている(水谷, 2013; 遠藤, 2017; 白石ら, 2017)。

ミナミアオカメムシは、千葉県では2009年に初めて県南部の勝浦市に設置された予察灯に誘殺され、翌2010年には南房総地域での生息が確認された。それ以降、同地域では予察灯への誘殺や複数種の植物への寄生が継続して確認されている。本種による農業被害の程度は現段階では低いものの、今後、水稻・野菜類での被害の増加が懸念される。被害対策構築のためには、県内における本種の発生生態を明らかにし、今後の分布拡大の動向について予測することが不可欠である。そこで千葉県では、2015~17年にかけての3年間、ミナミアオカメムシの県内での発生状況を調査し、現段階での分布地域を明らかにするとともに、冬季の気温条件が異なる場所における本種の越冬の可能性について試験し、今後の分布の拡大について考察した。その研究成果について紹介する。

I 千葉県におけるミナミアオカメムシの発生

ミナミアオカメムシの最初の発生が確認されてからまだ数年しか経過していない千葉県では、本種の発生密度は概して低く、年間を通して寄主植物を確認するのが困難であった。しかし、夏から秋にかけて栽培されるオクラやダイズにおいては比較的高密度で発生するため観察が容易で、特に家庭菜園での主要品目であるオクラは、栽培規模の大小はあるものの広く全県的に栽培されており、本種の寄生の有無を調査するには好適な植物であった(図-1)。そこで県内全域において、3か年にわたり9~10月にかけてオクラを中心とする寄主植物にミナミアオカメムシ成幼虫が発生しているかどうかを見取り調査した。調査地点数は各年73~165地点とした。

その結果、ミナミアオカメムシが県南部のほぼ全域に分布していることが確認された(図-2)。2014年の調査では発生が確認できなかった県北部の地域でも、2015年には東京湾沿いを中心に発生が確認され、さらに2016年には北部内陸部の複数地点でも確認されるなど、徐々に分布域が拡大している傾向が認められた。

2010年の初観察以降、本種が継続して発生している南房総地域に設置された予察灯(南房総市三芳地区)へは、2016年までは年間少数の個体が誘殺されるだけであったが、2017年の調査においては誘殺数が約260頭に急増した(図-3左)。この要因は明らかになっていな



図-1 オクラに寄生するミナミアオカメムシ

Occurrence and Overwintering of the Southern Green Stink Bug, *Nezara viridula* in Chiba Prefecture, Japan. By Ken SHIMIZU

(キーワード: 地球温暖化, ミナミアオカメムシ, アオクサカメムシ, 分布, 越冬)

*現所属: 同センター 病理昆虫研究室